

HOME AWAY FROM HOME



「日常生活の些細な困りごとを頼める相手がいない」「会話相手がいない」

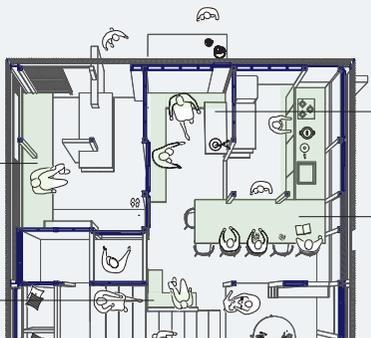
統計によると現代、高齢者の約30%が「会話相手がいない」

「人生の締めくくりである大切な数年間を、**誰とも話せず、誰にも頼れず孤独に終わる** ということは社会の大きな問題である。

独居高齢者の10人に1人が、**会話頻度1週間に1回以下**。電話でもいいから誰かと話したいという高齢者が日本には多く存在する。一生懸命生きてきても最期が孤立ならば、歳をとることへの希望が持てないと考える。身体は動かせるけれど、仕事を辞めたあと、自分の役割が見つからず、一日中家に引きこもり、何をして良いかわからないという考えの人も存在する。

人間関係の希薄さはお年寄りの方だけにとどまらず、**全世代で問題**になっている。1980年代頃までは、結婚家庭のほぼ2/3が専業主婦であり、母親は家事をして、子供の帰りを家で待っていた。しかし1980年代以降になると、**共働きの家庭は多くなり、核家族化**が進み、子供が学校帰り家に帰っても誰もお迎えに出来ない家庭が増加した。その変革期に、「学童」や「かざっこ」が増加し始め、同時期に子供の不登校問題が注目され始めた。

そしてこの頃、「心の居場所」といった学校に行きづらくなった子供が滞在する場所としての「居場所」という言葉が頻繁に使われるようになり、「子供の居場所論」という論文や文献が出版され始めた。つまり、親と一緒にいる時間、親からの愛情、家に帰った時に誰かに話したりすることの重要性というものがあることに気づいたこととなる。



土間空間
簡単に入りやすく、隣建物にある米屋の帰り、通りの前をたまたま通った人、バスの待ち時間など溜まりやすい

ダイニングテーブルを中心に座る居場所があるため、なんとなく話が入ったり入らなったりすることができると。

野菜販売のお会計を街の役割を求める人がボランティアとして行う。

役割を求める方がボランティアで規格外野菜を使った料理や、地元の野菜などを使った料理を提供。

みんなで喋りながら、栄養のあるものをきちんと食べる

働きて忙しく料理を作る時間がない家庭はここで子供を遊ばせ、食べて帰ることもできる。

不登校の人数推移

共働き家族の推移

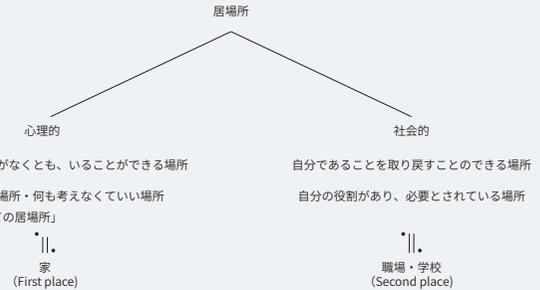
子供の不登校は休んだ日数に応じて不登校と認定されているが、時々休んでしまう子供、本当は休みたいたけれど親や先生からのプレッシャーで、無理やり学校に行き、嫌な思いをしている子供も多く存在する。**義務教育だからとい、義務的に小学校に行く必要はないと考える**。今まで、家に帰って親に相談していた話を、親でなくとも、身近に相談に乗ってくれる人、話を聞いてくれる人がいると、問題が深刻化する前に対処することがあるかもしれない。子供の不登校問題や自殺率の増加が大きく問題として取り上げられているが、**実際に不登校になる、自殺する一歩前段階**の人も多く存在する。

核家族化が進み身近な関係の人が離れ、近所付き合いも気薄化し相談したり、些細な事でも頼める相手を探すことが難しくなった。地域コミュニティは、元来多世代構造であり、子ども食堂や高齢者の施設などを区別して切り離して捉えることは地域コミュニティがもつ機能を分析する恐れがある。

居場所定義

居場所の意味(広辞苑)
いるところ。いどころ

<守られた孤独・積極的孤独>
人間には必要な居場所が2種類ある



<心理的居場所>

「そこに帰れば、なんとかなるような気がする場所」「安心して、惨めな気持ちにならずに孤独に浸り、秘密のようにそっと肯定感を召喚する場所」それは、わかりやすい「かたち」をもった「押し付けがましいフレンドリーさや虚ろな陽気さ、嘘くさい絆やテンプレートめいた家族イベント」といった過剰な物ではなくむしろ、「親しみを含んだ無関心さ」を持つ肯定感漂う場である。

家には家族がいるかもしれないが、家族が何もかも解決し、保証してくれるわけではない。家族は学校で起こった嫌なことや、友達を上手く作れないことなど全て、解決することは難しい。放置され、かえりみられないままに一人での状態に追いやられる**消極的孤独**ではなく、安心して「一人であること」を選び、味わえるような**積極的孤独**が一人ひとりの子供の安心感や楽天性、個性を伸ばし、広げていく。

<社会的居場所>

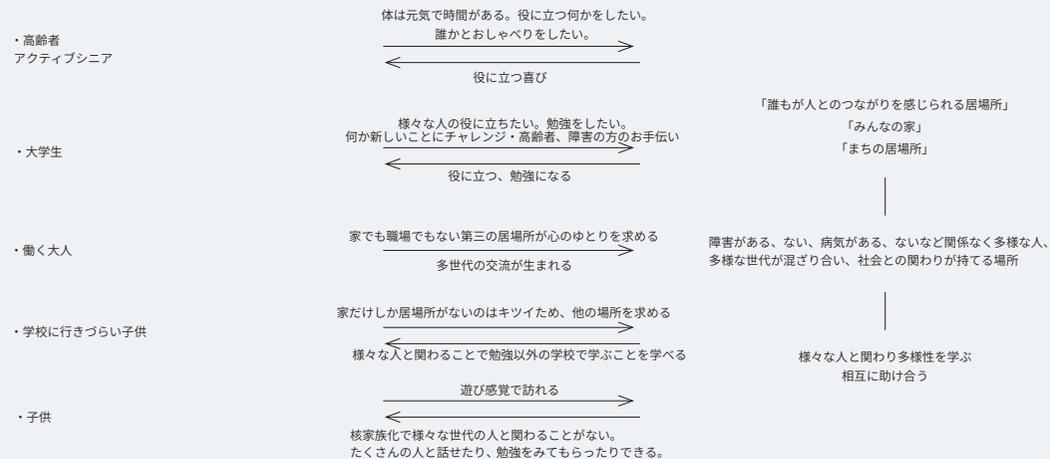
居場所を「自分が他人によって必要とされている場所であり、そこでは自分の資質や能力を社会的に発揮することができる」「自分であることを取り戻すことのできる」場所と定義している

この考えは高齢者やフリースクールに通う子供、生きている価値が分からないと考える人にとって大事である。

多世代構造

地域コミュニティは、**元来多世代構造**であり、子ども食堂や高齢者の施設などを区別して切り離して捉えることは地域コミュニティがもつ機能を分析する恐れがある。高齢者にしかできないこと、子供にしかできないこと大人しかできないこと、その世代、年齢の人、その人にしかできないことはあると考える。それぞれの特徴を活かして与える・与えもらう関係を多世代間で作る必要がある。

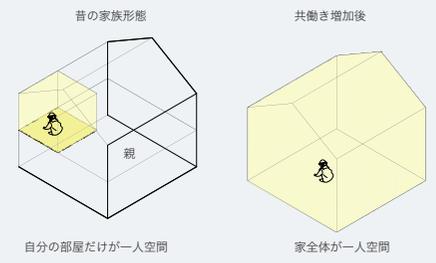
<まちの居場所・みんなの家への関わり方>



家での隠れる場所

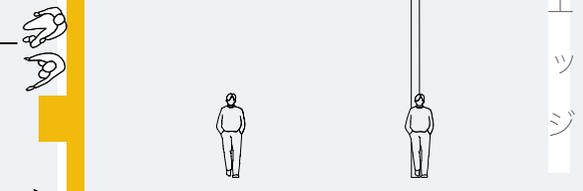
共働きが多くなり、家に帰っても一人、もしくは家にも個室がそれぞれあるので、子供達は一人になりたい、隠れたいと思えば個室に逃げ込むことができる。

ここでの「隠れる場所」は、驚がかりながらもちょっと未だ身を隠している、というようなもの。子供達は「隠れている」ということを、実は他の大人や子供にわかって欲しい。身のまわりで見つけた子供の居場所も、四方向完全に閉じられた個室ではなくて、一方空いていたり、上から覗けたりする。そんな隠れているところを知ってもらふ場所作りを行う。



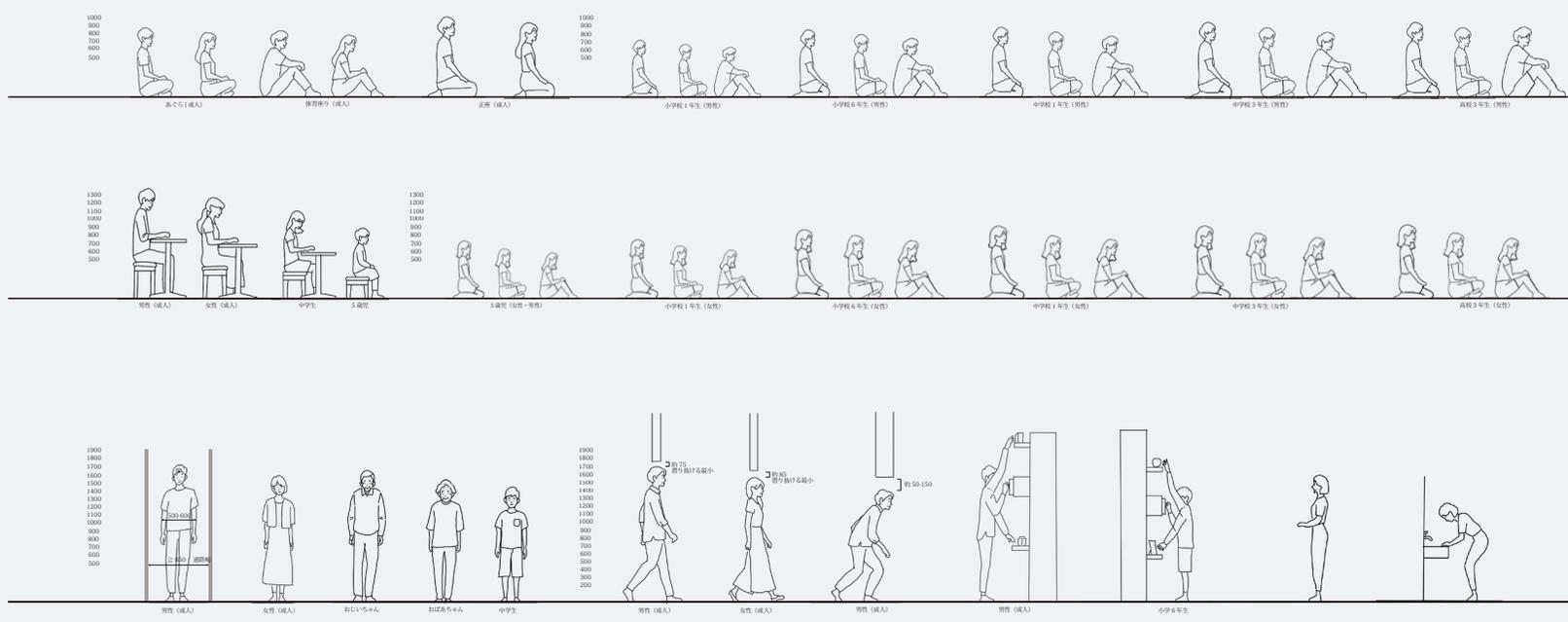
街中で立ち止まる時

無意識にどこを選んでいるのか

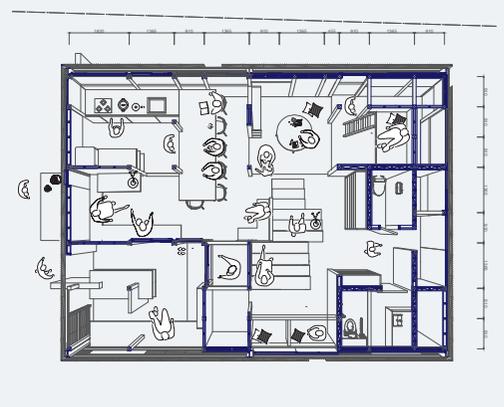
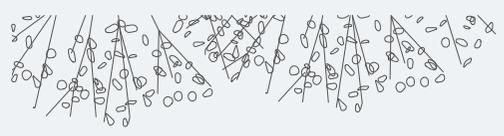


しばらく足を止める時、人々は決まって空間の線に沿った場所を探す。空間の線に身を置くと、私たちは歩行者の流れを妨げることなく、自立たず静かにそっとその場にどまることができる。エッジにいると周囲の物事を良く観察することができ、背後が保護されていて不意をつかれないで済む。

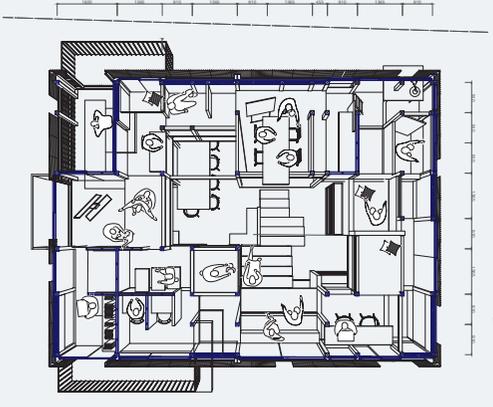
柱や壁が柱通常より太く厚い場所、延長しているいる箇所を作り、エッジを作り出す。



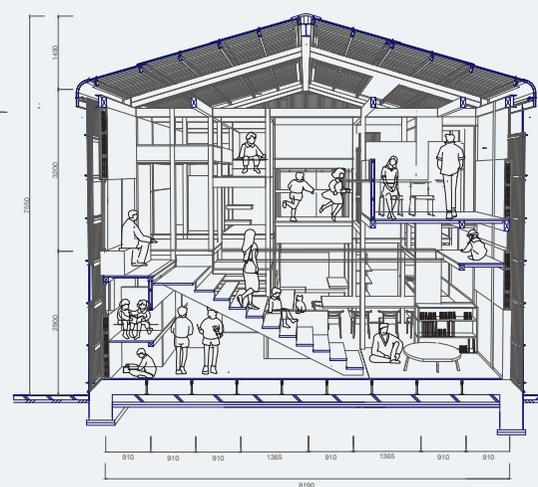
<p><あくら> 小学1年生 頭が隠れる < 700 目線が合わない < 600</p> <p>小学6年生・中学1年生 頭が隠れる < 800 目線が合わない < 700</p>	<p><正座> 5歳児 中学3年生・高校6年生・中学1年生 頭が隠れる < 900 目線が合わない < 800</p> <p>小学1年生 中学3年生・高校3年生・成人 頭が隠れる < 800 頭が隠れる < 1000 目線が合わない < 700 目線が合わない < 900</p>	<p><体育座り> 5歳児 中学生・成人(女性) 頭が隠れる < 600 頭が隠れる < 800 目線が合わない < 500 目線が合わない < 700</p> <p>小学1年生 高校生・成人(男性) 頭が隠れる < 700 頭が隠れる < 900 目線が合わない < 600 目線が合わない < 800</p>
---	--	--



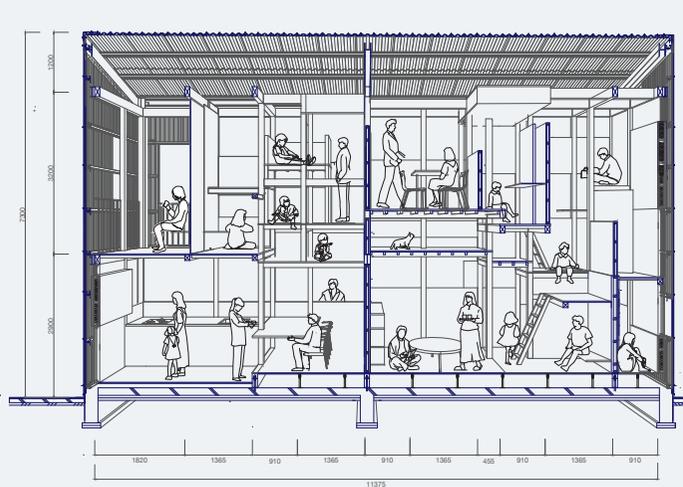
2F 平面図



2F 平面図



断面図



断面図